

# 北海道師範塾 「教師の道」 塾頭通信

第653号 平成25年12月3日

## 自動車の原罪

自動車は、2つの原罪を持っているといわれます。

「原罪」といえば、アダムとイヴが人間として初めて神の意思に背き、犯した罪の事を指します。その罪とは、神が食べることを禁じていた「善悪を知る知識の木の実」を食べた事で、これにより、人間は様々な生の苦しみを背負う事になったと旧約聖書（創世記）は伝えています。

それでは、車の「原罪」とはどういう事なのでしょう。

アダムとイヴが口にした木の実を「禁断の木の実」といいますが、人類が「自動車」の登場により手に入れた「移動の自由」は「禁断の木の実」だったかも知れません。何故なら、人類は、「移動の自由」を手に入れたものの、それと同時に二酸化炭素の排出など「環境への付加」と事故により「多数の人命が失われる」という頸木を負う事になったからです。

それでも、人類は科学技術の発展により、「排気ガスの除去技術」はじめ「ハイブリット車」や「電気自動車」の開発等を通じて、「環境への付加」という罪は、少しは軽くなりつつあります。

一方の「事故による人命の損傷」という罪は、どうでしょうか？

我が国では、いまだに年間4千人を超える方々が交通事故で亡くなっています。特に、飲酒運転など悪質な運転による事故は後を絶たない事は驚くべき事です。

先日、「自動車運転死傷行為処罰法」が成立しましたが、恐らくこの法律を以てしても、事故を根絶する事は難しいと思います。幾ら悪質運転を厳罰化したとしても、自分とは関係ないと思っている無自覚なドライバーの前には、無力としかいいようがありません。

「人命の損傷」という罪は、「移動の自由」と引き換えに甘受出来る筈はありませんが、それでも一向に減る気配がないのは、「移動の自由」という魔力が如何に大きいかを物語っています。

こうした中、自動車産業界は「環境への付加」の軽減と「人命の損傷」の防止という2つの難題に取り組み、成果を上げつつあることは確かです。

一つは、先程も述べた様に、様々な環境に優しい車の登場であり、今後更に環境技術の向上が期待されます。

もう一つは、人間がコントロールせずに走ってくれる車の開発です。運転手はアクセルとブレーキから足を外し、ハンドルも握っていないのに、カーブを曲がったり、前の車との車間距離を維持して走行したり、障害物の前では自動的に止まる、というのは夢のような話ですが、これが現実になりつつあります。

人間が判断して運転する限り事故は防げないとすれば、人間が車を運転するのではなく、車が人間を乗せて走る、そうすれば事故も、違反も無くす事は可能になるかも知れません。もっとも、完全に自動走行する車が広く普及するかといえば懐疑的です。何故なら、人間から車を運転する喜びを取り上げる事は、不可能だと思うからです。

それよりは、飲酒運転に絡む悲惨な事故が後を絶たない中、運転席でアルコールを検知するとエンジンがかからない車の開発を最優先すべきだと思いますが如何でしょうか。

勿論、先日、障害物を検知し自動ブレーキをかける機能の体験走行をしていた乗用車がフェンスに衝突するという事故があった(11月12日付北海道新聞)様に、如何に技術が向上したとしても、完璧に事故を防ぐ事は不可能だと思います。

結局のところ、「事故による人命の損傷」という車が持つ原罪は、車の運転という魔力に引き込まれた人間が、自らの意思を以て「安全運転」に徹する外にাগなう道はないのであり、制御技術の向上はそれを支える役割に過ぎないのだという事を、認識して置く必要があるでしょう。(塾頭：吉田 洋一)